



# ウィル新聞



## 聴覚過敏のお子さんへの取組

今回は、今年度、ウィルに通っている小学2年生の男の子Bくんの取組について、ご紹介いたします。Bくんは、音に対する過敏さがあり、人の声でざわざわした環境や大きな音が非常に苦手です。最近、音楽の授業になかなか入りにくいという状況が続いていました。そこで今回、『音の聞こえかたのちがい』について療育の中で取り組みました。そして、日常生活における様々な音に対して、どのような対処の方法があるのかをBくんと共に考えた活動についてご紹介いたします。

自閉症の子どもたちの中には、聴覚や視覚、触覚など、感覚に過敏さがある人がいます。聴覚過敏は、よく知られている困難さで、突発的な音や特定の音（赤ちゃんの泣き声やスピーカー、金属音など）に対して強いストレスや不快感を感じる場合があります。過敏さが強いお子さんでは、学習や遊び等の活動への集中が難しくなったり、騒音のある場所への外出が困難になったりする場合もあります。

子どもたちが何らかの活動に取り組み際に、ストレスなく前向きに取り組めるようにするために、不快に感じる不要な音を何とか軽減することが重要だと考えています。

とは言つものの、周りの環境を静かにできれば早いのですが、学校や地域ではなかなか難しいです。特に学校では授業内容により、グループ活動で話し合いをしながら進めていく授業形態もあります。他の子どもたちの教育活動を制限するわけにもいかないのが現実です。

そんなときによく使うのが、イヤーマフ（防音保護具）というグッズです。このグッズを着用することにより、周囲の音や人の声が小さく聞こえます。

Bくんの場合、次のことを目標にして取り組みを進めました。

- ① 音や声には「大きさ」があることを知る（音の大きさを数値化し、イヤーマフで図にして示す）
- ② イヤーマフ着用時とそうでない場合の音の聞こえかたのちがいについて知る

療育では、『音の実験』という活動を設定して取り組みました。内容は次の通りです。

- ① 音の大きさを1〜10段階に数値化。音の大きさに幅があることを伝えました（下図）
- ② 次に、色々なポリウムで音楽を流し、どの大きさに聞こえたかを表に記入してもらいました（画像1）。
- ③ 次に、Bくんにイヤーマフを着用してもらい、②と同様の流れを行いました。（画像2）

活動後、Bくんは以下のことを理解しました。

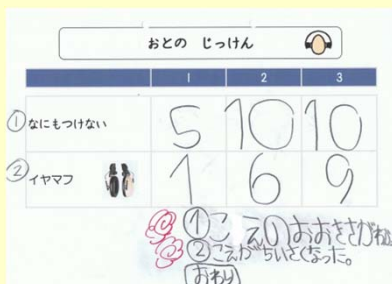
- (1) 音には大きな音と小さな音があるということ
- (2) 大きな音は、Bくんは苦手で、うるさく感じるということ
- (3) イヤーマフを着用したときのほうが、音が小さく聞こえること

療育活動の振り返りの時間に、「うるさいときはイヤーマフを付けてみます」とBくんご本人から私にお話しをしてくださいました（画像3）。

Bくんは音楽の授業の際、大声を出したり他児に必要以上に関わろうとする等の行動が見られていました。恐らく、音に対するストレスからこのような行動が生じていたと推測されます。今後、必要な時に自ら回避できる手段をさらに増やしていくことができるように取組みを進めていきます。

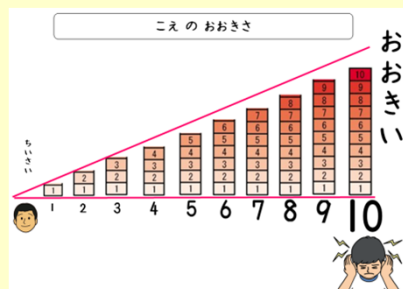


↑画像1 『音の実験』の様子



↑画像3 (上) 振り返りの時間より「声の大きさが分かりました」とNくん

→画像2 (右) 音の聞こえ方を1から10の数値で記入



上図：「声の大きさ表」

↓活動中のBくん



### 編集後記

今回のウィル新聞の発行は、8月に予定していましたが、テーマは、「家事/地域生活スキル」の取組についての内容を予定していません！  
当法人の療育センターanやLinkでも同様に新聞発行しておりますので、そちらも併せてご覧下さい！  
（中野）